

# マークが託したこと

## ——マークス・E・レビックの思い出

玄田 有史

マーク・レビックは、日本の労働市場を深く理解していた貴重な海外の研究者だった。2015年1月29日、自身の59回目の誕生日を待っていたかのように、その10日後に彼は長い眠りについた。訃報を耳にし、マークが長く大病を患い、それでも懸命に生きようと努力してきたことを知る友人たちは、誰もが深い悲しみを覚えると同時に、お疲れさまという言葉を心のなかに思い浮かべたことだろう。

マークがはじめて日本に本格的な関心を持ったのは、大学の学部生時代だったようだ。カナダ出身の彼は、米国のハーバード大学で地学を学んだ。その頃、韓国そして日本を旅し、そのときの体験から日本に興味を抱くようになる。

卒業後はカナダに戻り、一時期は地質学者として働いた。その後トロント大学の大学院に進学し経済学修士号を取得、再びハーバードの博士課程に進む。そこでリチャード・フリーマンを指導教授として労働経済学を学び、日本経済の隆盛に世界中の注目が集まっていた1990年に経済学博士号を取得した。そこから日本経済を専門とする実証的労働経済学者としてのマーク・レビックの職業人生が始まった。

マークが研究者としてはじめて日本に長期滞在したのは1992年2月から7月にかけて日本開発銀行（当時）の設備投資研究所に下村フェローとして在籍していたときである。私がマークと最初に出会ったのも、その研究所でアルバイトをしていたときだった。ハーバード大学でフリーマンやラリー・カツなどを中心に、拡大する賃金格差などに関する切れ味鋭い実証研究の世界をフルに経験し、その分析手法を身に付けていたマークは輝いてみえた。

ちなみに、現在日本の労働研究者の多くが活用している統計ソフトSTATAの使い方をはじめ

て私が教わったのは、開銀時代のマークからである。当初はフロッピーディスク数枚に取められたソフトからいくつもの統計分析ができることに驚嘆を覚えたものだ。

マーク・レビックという人物をひとことで表現するのは難しいが、強いて言えば生涯を通じて謙虚そのものだったということだろう。いつも奥ゆかしく、自分の正当性を声高に主張するようなことは、まずなかった。ただ、物静かで知的な雰囲気、満ちたマークのふるまいは、研究に対する揺るぎない自信がそれを可能にしていたように思う。

日本の労働市場を分析しようとするに際し、マークが常々不満に感じていたことがあった。それは日本のマイクロデータの利用制限だった。1990年代にも政府統計の個票データを用いた研究は日本でもいくつか存在したが、その幸運に恵まれる研究者は限られていた。特にマークのような海外の若手研究者が個票データにアクセスすることは、事実上不可能だったように思う。日本の賃金格差などを実証分析するために、マークが労働省（当時）の『賃金センサス（賃金構造基本統計調査）』を何巻も図書館から借り出し、みずから懸命にデータを打ち込んでいた姿を思い出す。

それも2007年5月に統計法が改正され、現在は研究のために政府統計を活用する機会は大きく広がった。マークにはその機会を得て、思う存分マイクロデータを活用し、日本の研究者がまだ発見していない重要な事実を見出してほしかった。かえすがえす残念でならない。

マークは1990年からコーネル大学に属し、94年以降は英国オックスフォード大学のNissan Institute of Japanese Studiesで日本経済の講師となる。オックスフォードでは、多くの日本人研究者がイギリスで研究する機会を創ることに尽力をしてくれたのもマークであり、私も恩恵を受け

た一人である。慶応義塾大学の太田聰一氏をはじめ、マークが博士論文の審査に当たった日本人もいる。マーク自身も1996年の名古屋大学および1998年の学習院大学で客員研究員として、さらに2000年には日本労働研究機構（当時）の海外招聘者として長期滞在するなど、2000年代初めまでは頻繁に日本を訪れていた。

私自身がマークと最後に直接出会ったのは、2012年3月のことだった。東日本大震災から一年が過ぎ、日本へのエールを含めて震災後の日本に関するシンポジウムがオックスフォードで開催された。Nissan Instituteの荻谷剛彦氏からは、マークは体調がすぐれないにもかかわらず、シンポジウムの企画に尽力していたと聞いた。久しぶりに会ったマークは、やつれてこそ見えたが、それでも鋭くかつ暖かい眼差しは、はじめて会った20年前とまったく変わっていなかった。

レビックは、けっして多産とはいえなかったが、それでも今後継承すべきテーマを含む重要な研究論文を遺している<sup>1)</sup>。

その一例として企業規模間賃金格差についての詳細な実証分析がある。規模間格差は近年注目されることの少ないテーマだが、今後脚光を浴びるであろう重要な問題になりつつある。具体的には、圧倒的な人手不足にもかかわらず、なぜ中小企業の賃金は大企業に比べて伸びを欠くのか、問われている。非正規労働者の増加、中小企業の労働生産性の停滞、高齢者等の潜在的な超過労働供給圧力、介護労働者等の賃金に対する規制の影響など、いくつか原因こそ考えられるものの、明快な結論は得られていない。他にも、新卒市場の変化から、組合組織率の低下、定年後の高齢者処遇まで、マークの関心は実に多岐に渡っていた。

マーク・レビックは生涯を通じて一冊の著作を遺している。2005年に刊行された *The Japanese Employment System: Adapting to a New Economic Environment* (Oxford University Press) と題されたその著作は、1980年代から2000年代初めまでの日本の労働市場における構造変化の可能性を検証した、マークの研究の集大成である。そこでは新卒採用の変容による若年雇用の困難化、企業による非正規雇用重視の他、高

学歴化による一部女性の地位向上などを、持続的な構造変化として認めている。

さらには今後早急な対応が求められる課題として、労働力不足の問題を先んじて指摘している。その主張は今や自明に思われがちだが、深刻な人員余剰が課題であった2000年代初頭から警鐘を鳴らしてきたところに、マークの先見性がある。

一方で、レビックは今後も維持すべき雇用システムとして、長い年月をかけて企業内で培ってきた協調的な労使関係と、それに基づく労働者の熟練の重要性を常々主張してきた。2000年に日本経済新聞から受けたインタビューでマークは次のように述べる。「日本企業の競争力の源泉は労働力にある。トレーニング制度が充実しているので、労働者は互いに協力し、責任感を持って品質改善に取り組んでいる。こうした忠誠心や責任感を数値化して示すのは難しい。しかしそれこそが日本企業の強さの秘密であり、多くの日本企業はそれを失ってはいない」。

マークは自分の見立てが、はたしてその後も妥当であったのか、2000年代以降の日本の働く状況を、自分の力で検証したかったに違いない。考えてみれば、史上最悪の失業率など未曾有の混乱を経験した日本の2000年代の労働市場とは何だったのか。何が変わり、何が変わらなかったのか。その総括を労働研究者は十分に果たしたといえるのか。過去の石油危機、円高不況、金融不況などと比べて、2002、03年を中心とした雇用危機には確定した歴史的名称すらないのは、なんとも異様だ。レビックから託された労働市場の変化についての検証を、私たちは引き継いでいかなければならない。

マーク・レビックは、照れ屋で温厚、そしてユーモアを解する人物だった。拙宅に泊まりに来たとき、テレビでジブリ映画「ホーホケキョとなりの山田くん」(高畑勲監督、1999年)を観ながら楽しそうに笑っていた姿を思い出す。

マーク・レビックの冥福を心から祈る。マーク、ありがとう。

(げんだ・ゆうじ 東京大学社会科学研究所教授)

1) <https://ideas.repec.org/e/pre111.html>